

# 分割撮影ターゲット

分割した  
部分の  
撮影順序

1	2	3
4	5	6
7	8	9
10	11	12

分割撮影  
した理由

A 3 判 以 上 の た め

上記のとおり分割撮影した事を証明する。

0698

0699

0700

0701

0702

0703

0704

0705

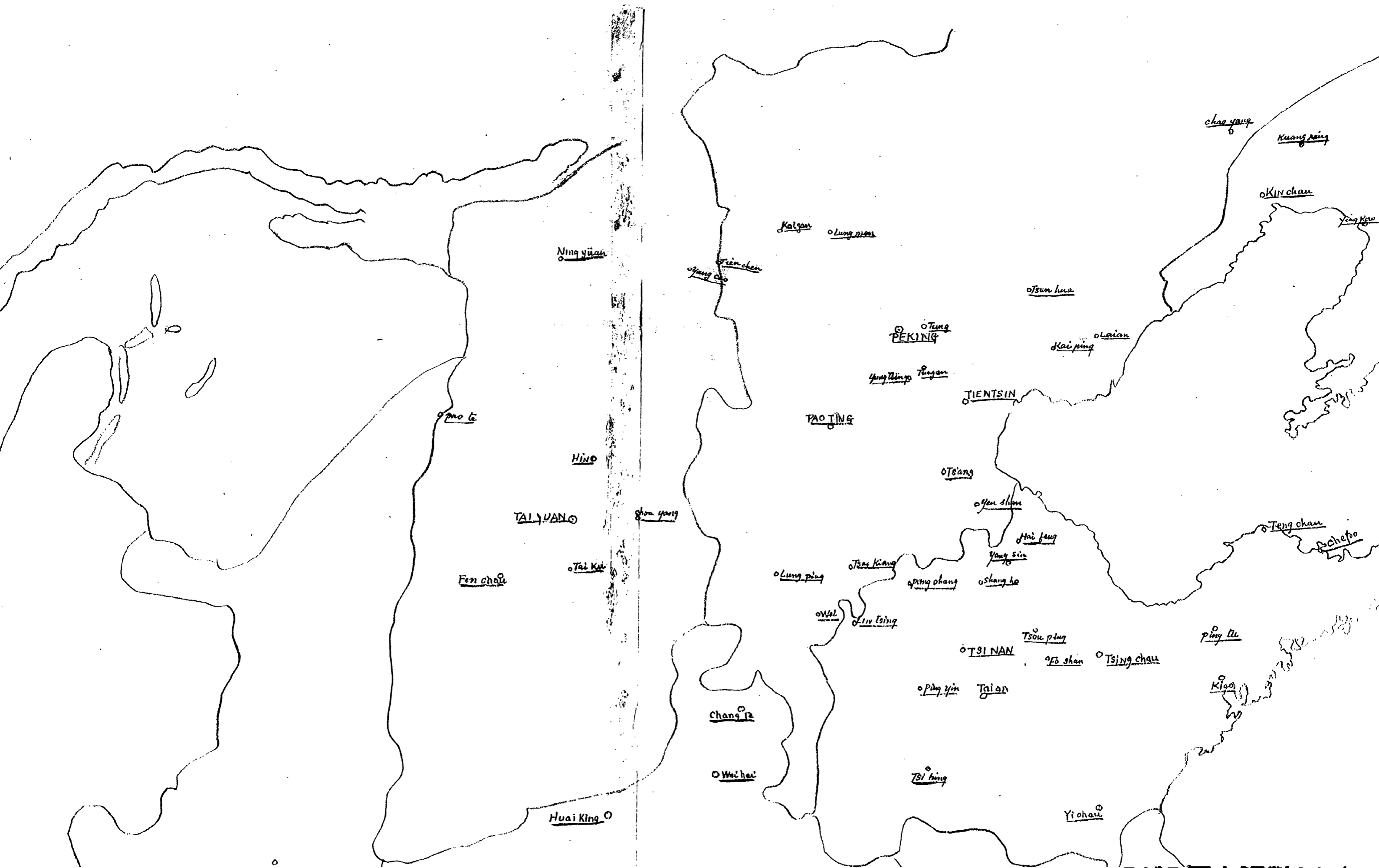
0706

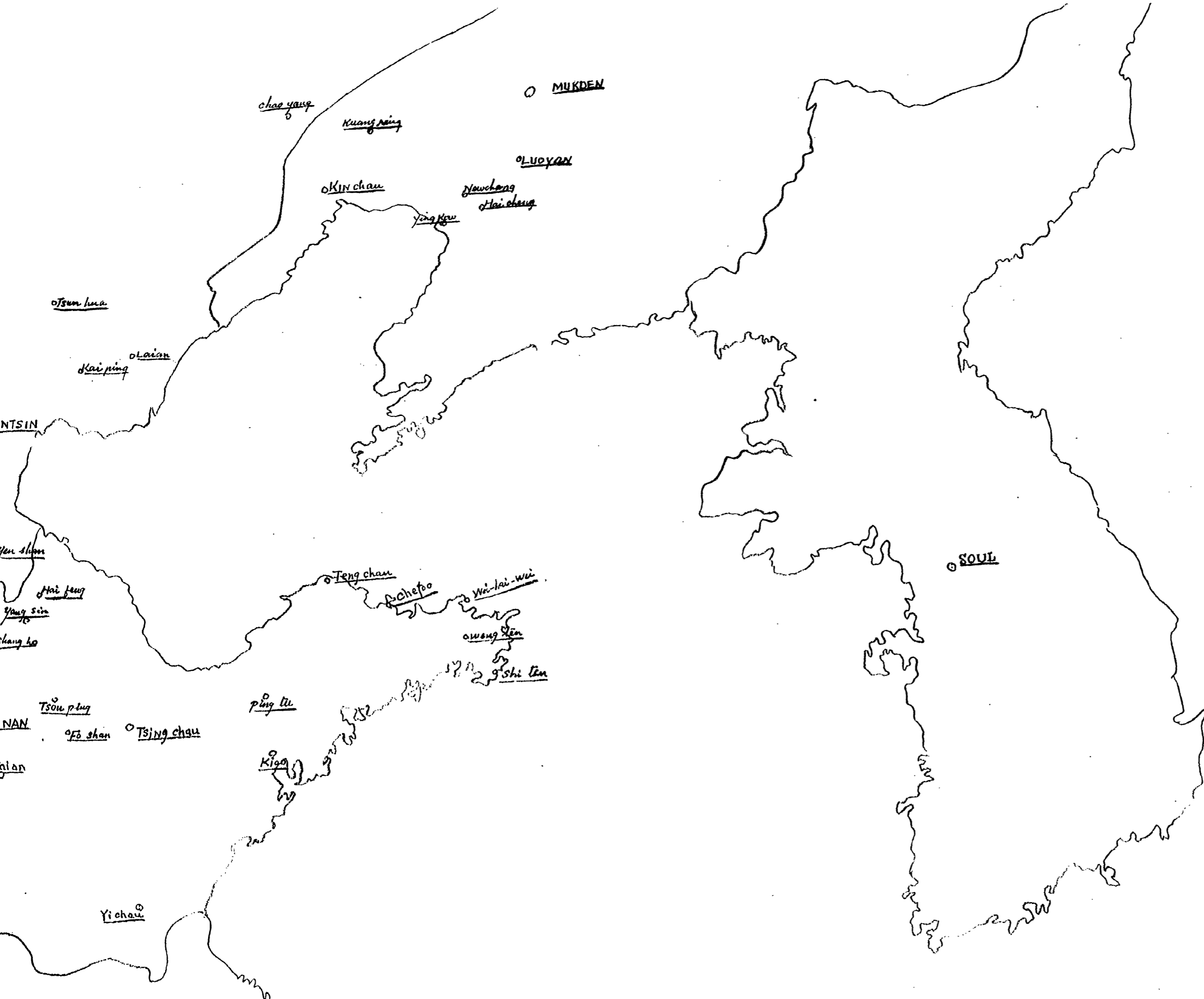
0707

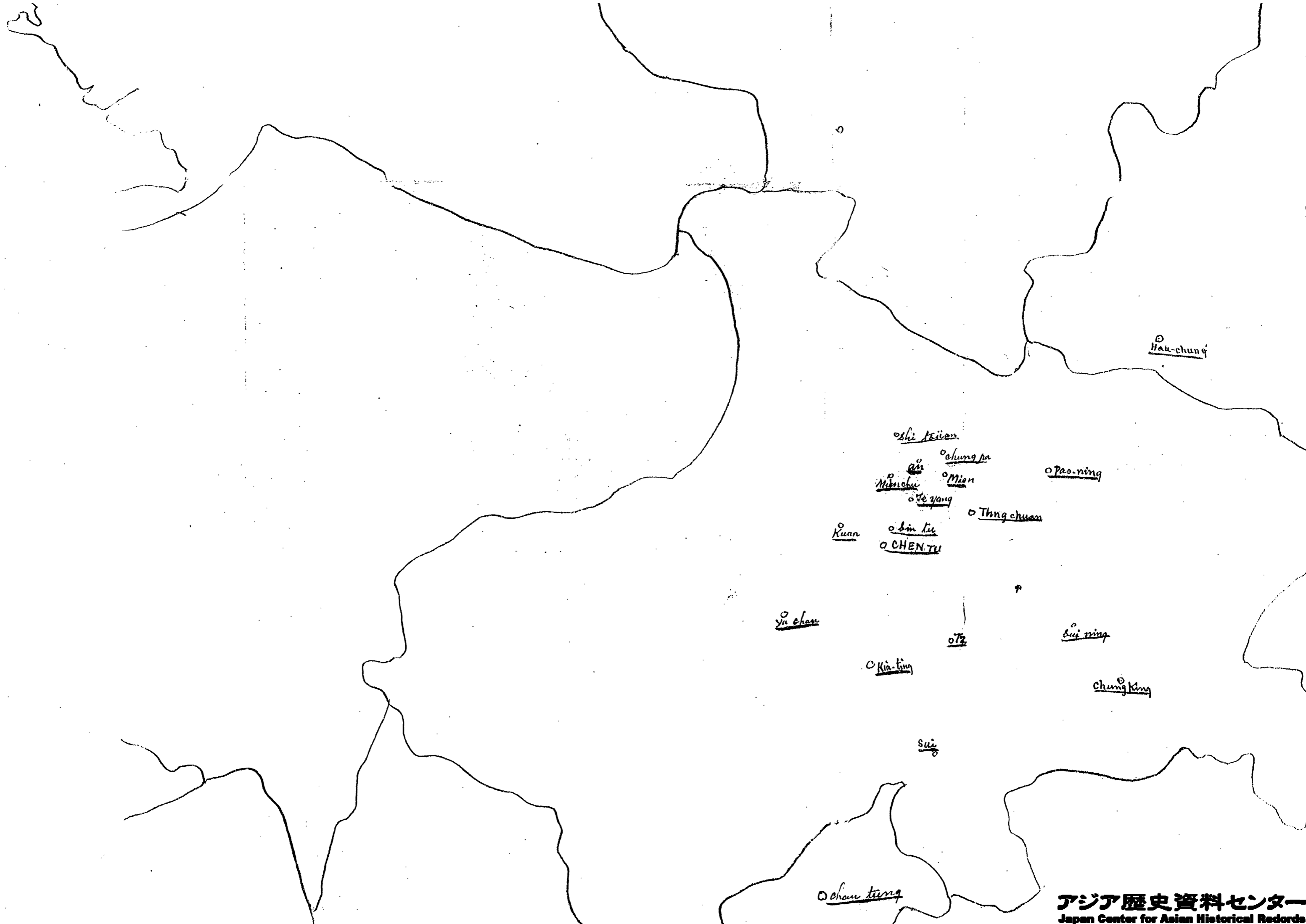
0708

0709









○ Hsu-chung

○ Shi-tai-an

○ Chung-pa

○ ai

○ Mian-chu

○ Mian

○ Pao-ning

○ Te yang

○ Thng chuan

○ Kuan

○ bin lu

○ CHEN TU

○ Yu chao

○ OT

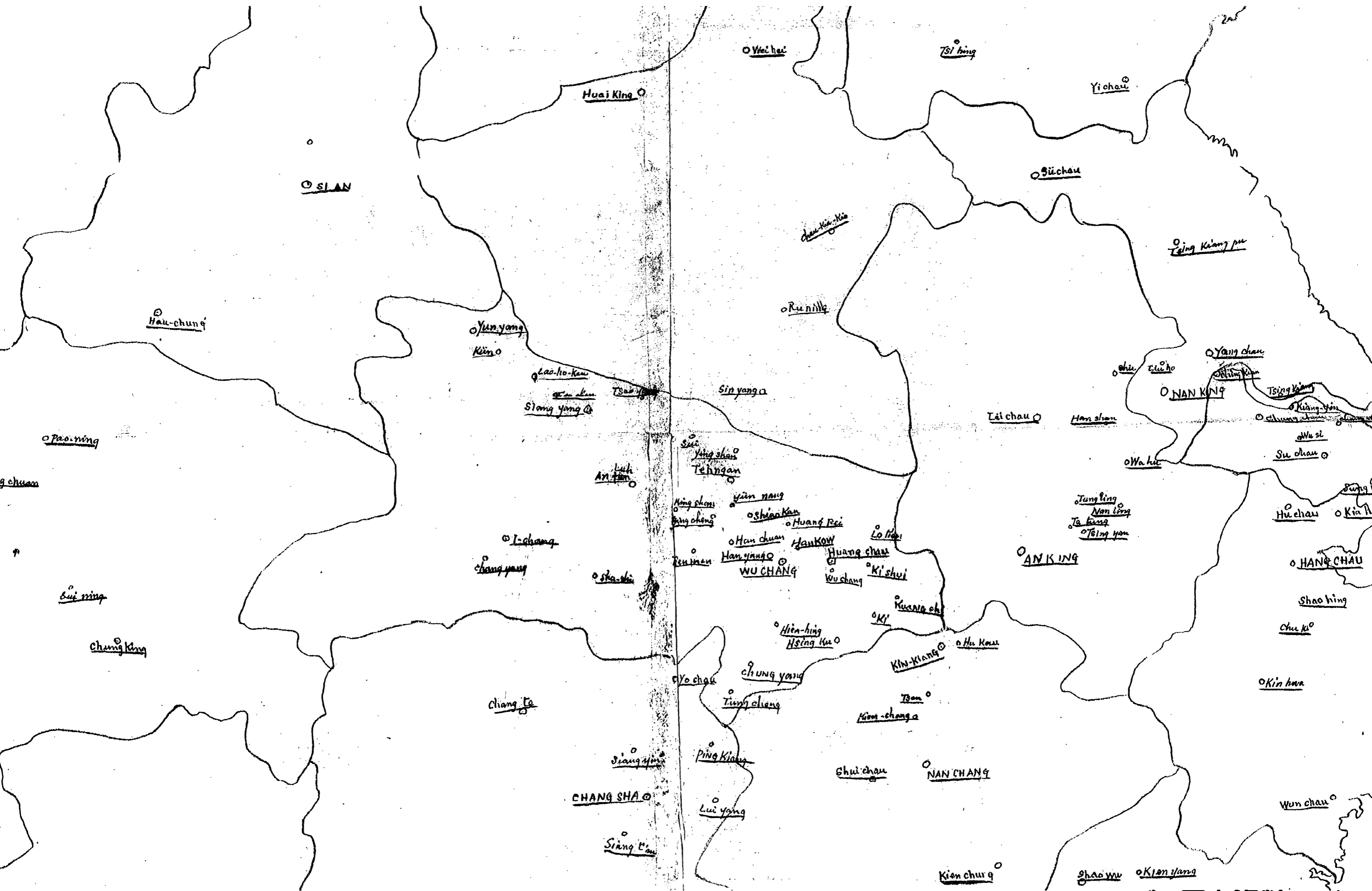
○ Sui ning

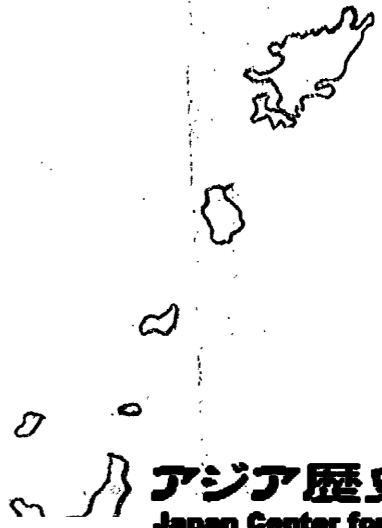
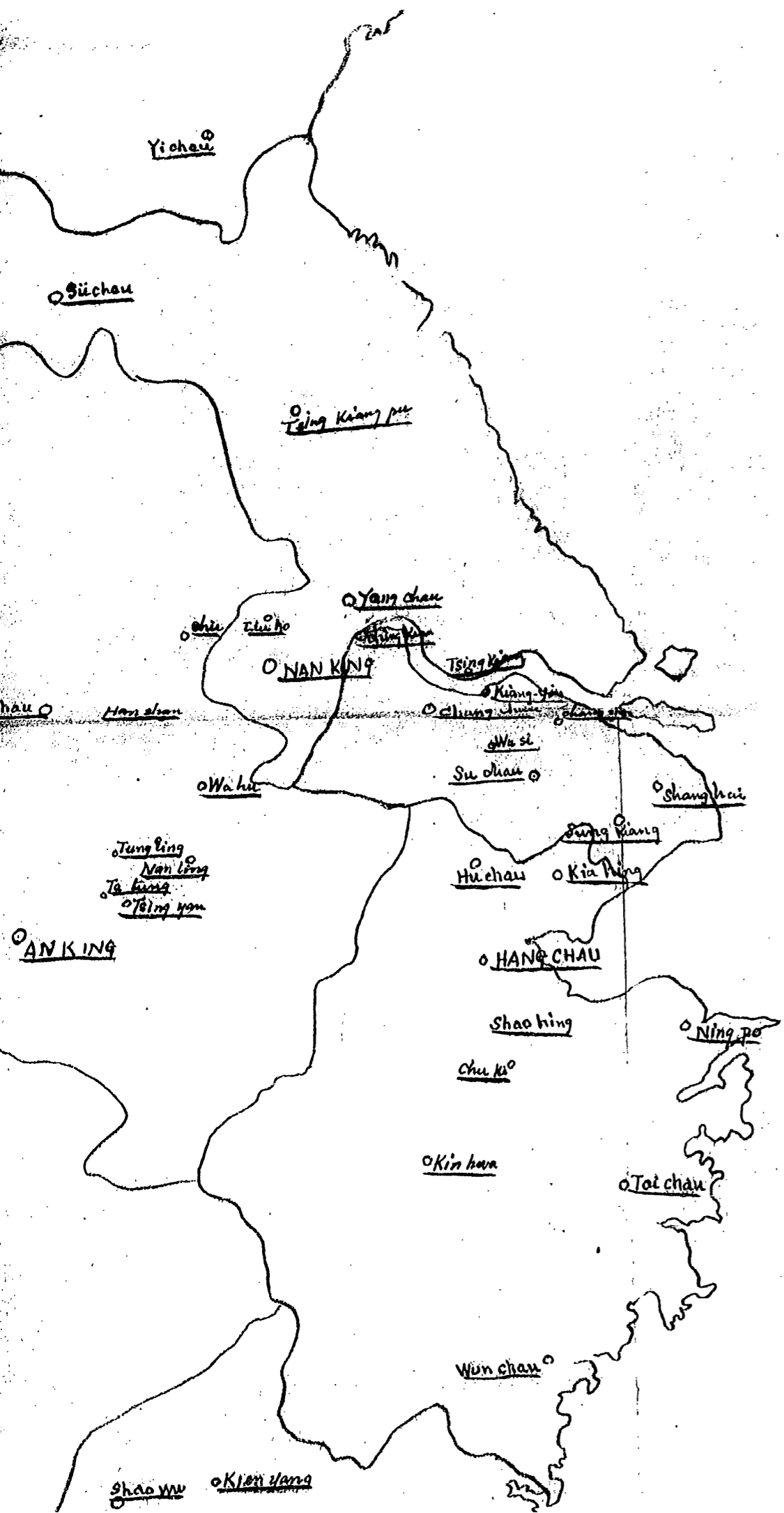
○ Kia-ling

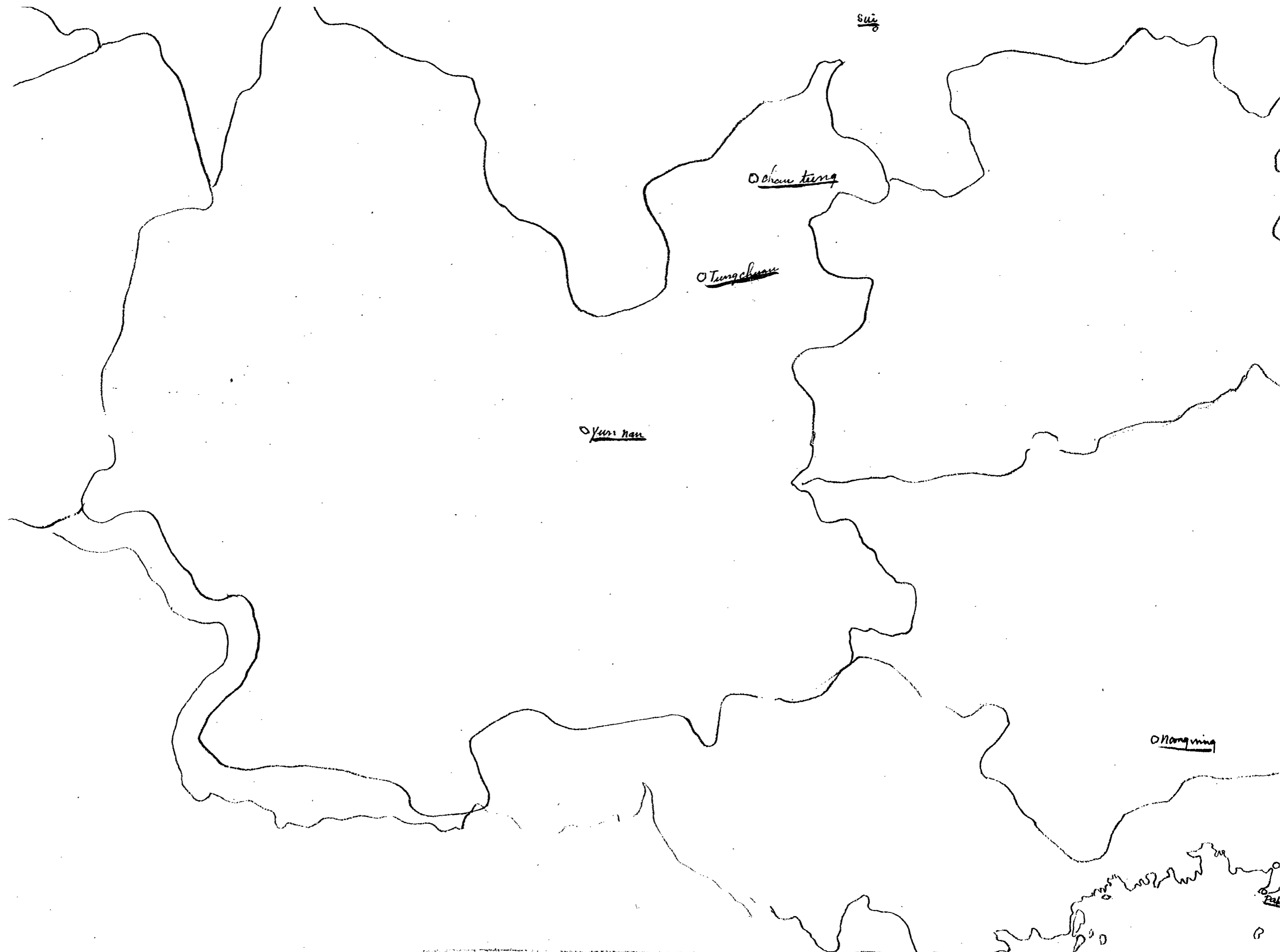
○ Chung King

○ Sui

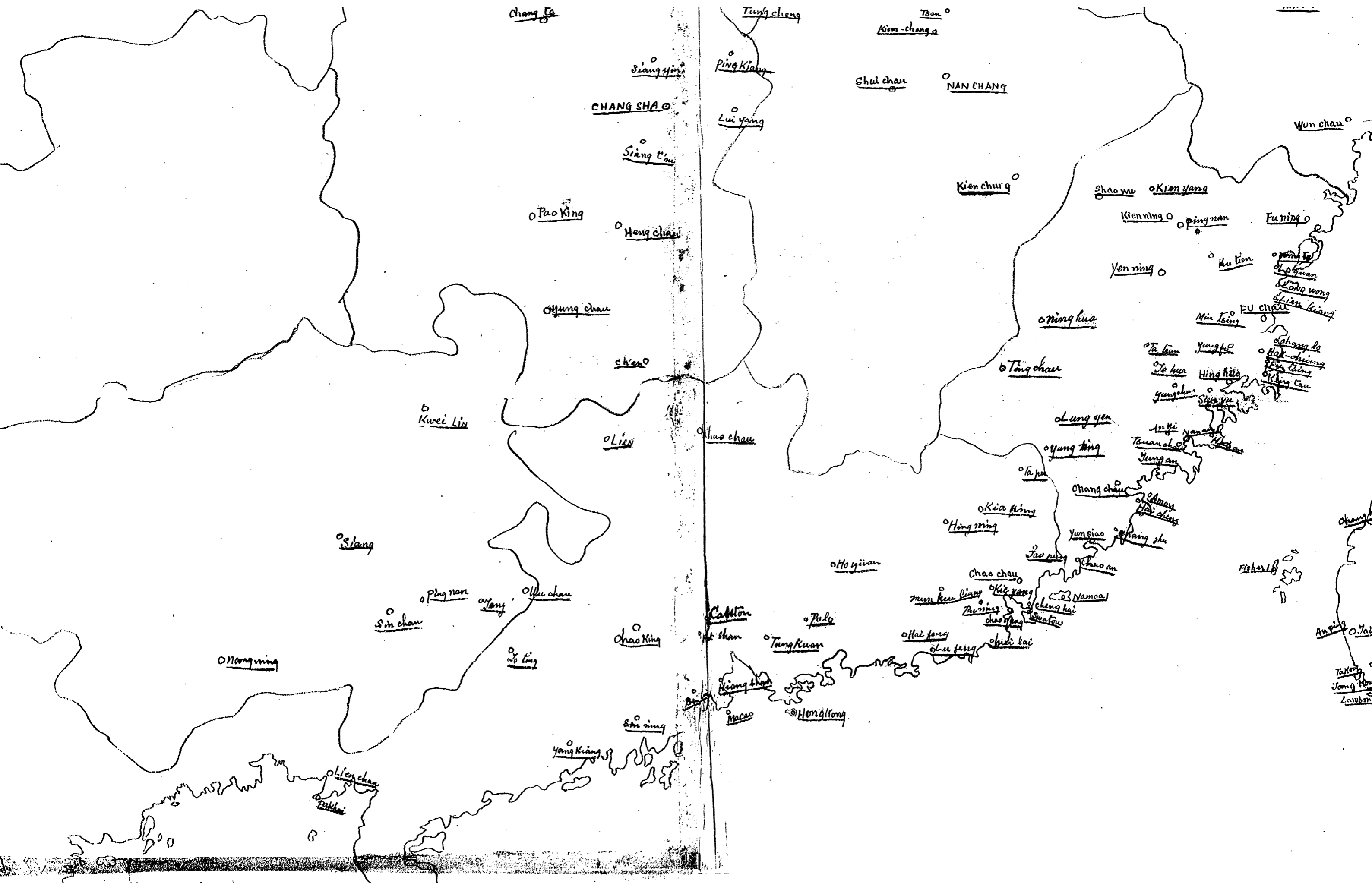
○ Chau tung











Chang te

Tung cheng

Tsan  
Kien-chang

Siang yin

Ping Kiang

Shui chau

NAN CHANG

CHANG SHA

Lui yang

Wun chau

Siang tau

Pao King

Heng chiau

Kien chun g

Shao wu Kien yang

Kienning ping nan

Fu ning

Hung chau

ning hua

Yon ning

Kai tien

Min tsing

Shan tai  
Shan guan  
Long wong  
Lien kiang

chen

Tung chau

Shang lo  
Hak-ching  
Tsun ling  
Kiang tau

Kwei Lin

Lien

Huo chau

chung yen

Yung fu  
Jing hia  
yung hui  
Shia yu

Siang

Yung ting

tsun chieh  
Jung an

ping nan

ong yang

Hui chau

Ta pu

Chang chau

Shan  
Hui cheng

sin chau

to ling

Chao King

Hogyian

Kia King

Hing ming

Tao ping

Chao an

Nong ming

ong yang

Chaiton

Po lo

Tung Kuan

Chao chau

mun kee ling

Kai yang

Cheng hai

chao yang

Swatow

Hai yang

Chu yang

Chu kai

Lien chau

Pak hai

Yang Kiang

Sin ning

Hong chau

Macao

Hong Kong

Hai yang

Chu yang

Chu kai

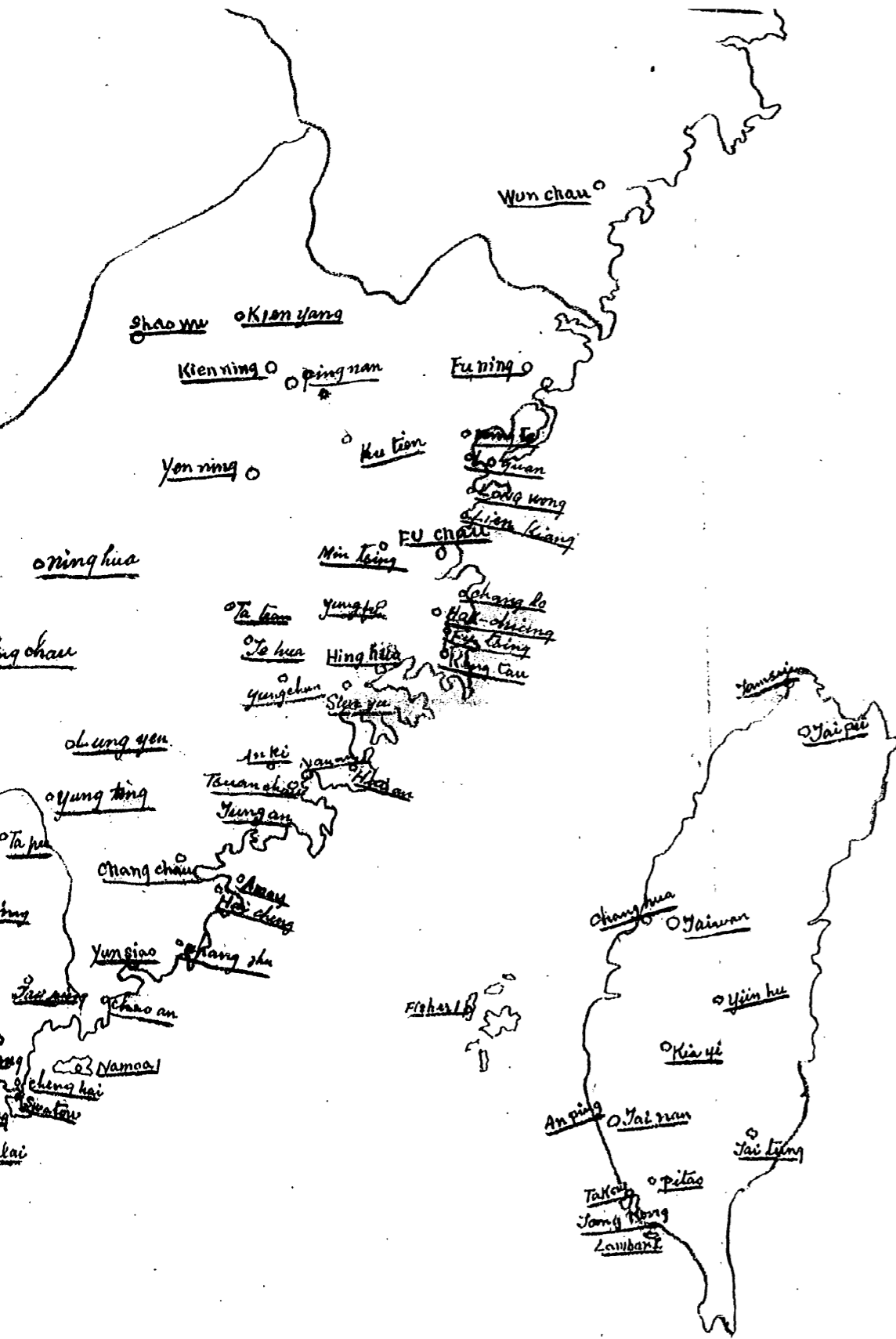
Fisher Is

Anping

Takou

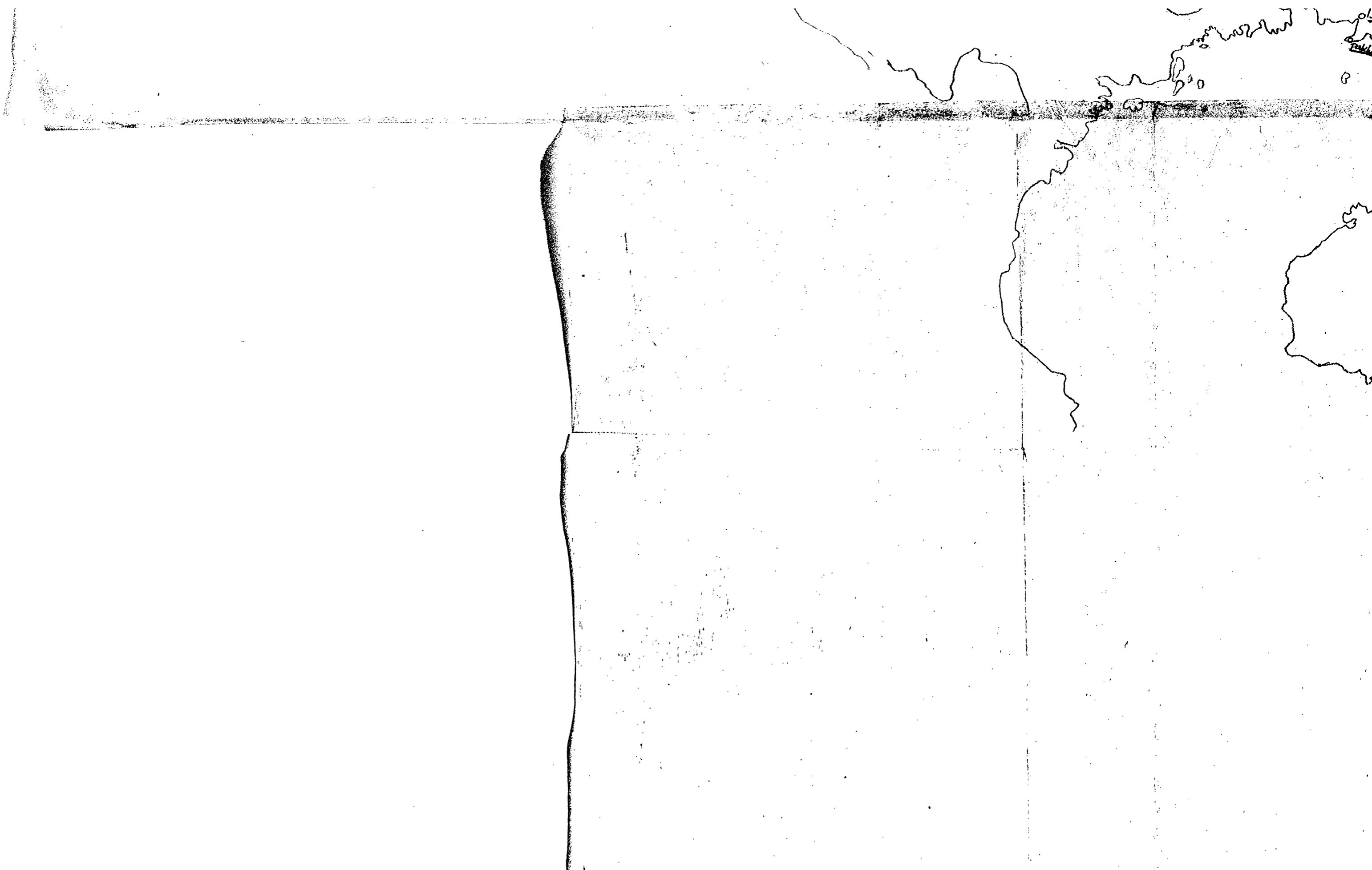
Jong Man

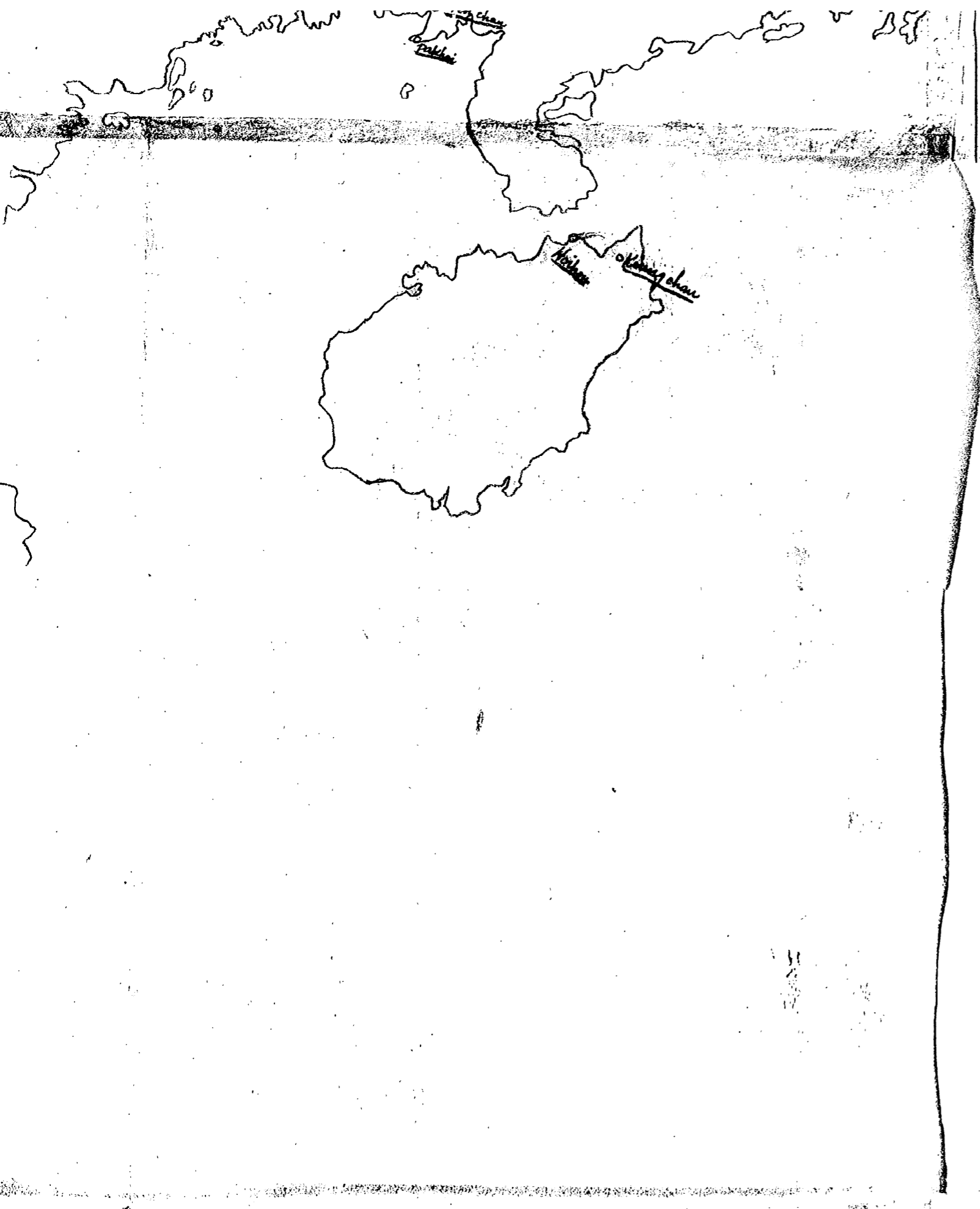
Lamban



明治四十年四月  
 海軍大臣尾本大將  
 先、投出ミタル支那、インディ  
 ミシヨニ、勢力の範圍を重  
 ニ揚子江流域ヨリ北方省  
 ニアルモ此ノ配置ニ依ル  
 他ノプロテスタントモ  
 ノ勢力揚子江流域ノ  
 南方ノ各省ニ重ク殊ニ  
 福建省ニ多ク見ル

China Inland Mission, Station. 先 = 投出セリ 對照セヨ  
 The station of other Protestant-Mission (1905)







供首

軍務局

艦政部

第三編  
第四部  
第一組

伏桑第 9 號

明治四十一年四月三日

海軍大臣男爵齋藤實發

村路

扶桑艦長築山清賢

水部事務結了即日横須  
船解部事務結了即日横須  
海軍港務部引渡済候

既

海軍

0710

4-8

四六

原

供覽

五月十一日

松江第一九九號

明治四十年四月廿五日 於元山港

松江艦長 海軍中佐 金屋六郎

松江府司令官 長官 勇將 村松 義典

江陵府視察ノ関スル件

別紙内藤大尉江原道江陵府視察記事 産拾

若進書

軍務局

軍令部

参謀長

水京

副官

参謀

海軍

五三

海軍

小林

出

終

各  
海軍

0711

5-14-3 200

江陵府視察記事(明治四十一年四月廿一日)

松江分隊長海軍大尉内藤有一

位置及交通。

江陵ハ江原道ノ首都ニシテ其位置水源端ト竹辺  
湾ト約中央ニ位シ安木津ヨリ一里江門ヨリ  
一里半ト称ス户数約五百郭ヲ圍ラシ城内ト  
称ヘ郡守此ニ居ラ設ケ以テ府内ヲ監轄ス  
郡守ハ且ツテ我國ノ慶應義塾ニ留學ス



ル多ナリト云フ

海工に於ケル交通は目下陸軍運送船扇海丸  
 毎月往復各二回宛釜山元山間、定期航  
 海ヲナス、途次安木津、寄港シ江陵ト連絡  
 フ保ツテミレテ郵便物及其他、貨物食糧  
 等ノ輸入ハ全然是レに拠ルモノナリト云フ安木津  
 ハ江陵ニ沿テテ流ル河(名ヲ逸ス)ノ河口ニ当リ  
 海底岩石多クテ從テ錨搔キ悪シキ錨地ニシ  
 テ肉眼ヲテテ見エ能フ距離ニ通例破  
 洵ナスト虽ハ風波ノ虞レハ片ハ北方約五哩  
 ニテ注文津(韓國南班測量根據地ヲ設ケル地

0713

二避難シ此處より貨物等産揚ゲラナスコアリ  
 江陵ヲテ陸路四里トス  
 陸工ニ於ケル交通ニ元来江陵ニ金山元山間  
 ノ街道ニ當リ巾約一間ノ道路ヲ以テ連ラセ  
 ヲ以テ南北ノ交通ニ稍自在ナリト虽モ西方  
 則ケ國內ニ入ラントモ高山連々トシテ交通  
 ヲ妨グ又海岸ニ出ツルニ田畑ノ間ニ巾約二尺  
 ノ小徑アルヲ載ラ通セズ然テノ貨物ノ轉入  
 ノ背ニ依頼セム可ラズ  
 江陵ヨリ忠州(忠清道)ニ軍用電話ヲ架設シ  
 アリテ忠州ヨリ更ニ京城迄電信線アリ是ヨリ軍

山又元山ト連絡ス

官衙

江陵守備隊トシテ歩兵第四十九聯隊第一中隊  
駐屯シアルモ此内ヨリ守備尾城内各所ニ派遣  
セルモノアリテ目下城内ニ下士卒五十八名ヲ以テ守  
備シ暴徒ノ起ルベシ域中ヨリ討伐隊ヲ出ス  
而シテ旧郡衙ヲ以テ本部ニ充テ韓人家屋ニ  
宿營ス 聯隊本部ハ鏡城ニアルモ總テ指揮  
ハ江陵守備隊ニ限リ直接京城司令部ヨリ  
受ケルモノナリト云フ(本月末歩兵第四十七聯隊  
ト交代スル由)

0715

敬言察署ハ敬言部一名巡査七名換察十二名  
 現在シアリ重ヨ江陵附近ノ安寧ヲ保持ス  
 換察ハ韓人巡査ヲ云フモノニテ暴徒ニ就  
 テノ偵察等ニ最モ効果アリト云フ  
 郵便局ハ日本技手三名在リ以テ郵便及ヒ  
 電報ノ事務ヲ取扱ノ郵便配達夫ニ城  
 外ニ出ルル時ハ必ズ護衛ノタメ兵備兵三名  
 ヲ附スル由  
 財務署ハ租税ノ件ヲ取扱ヒ韓人官吏ヲ  
 置キ執務ス  
 郡衙ハ郡兵ノ政務ヲ執ル官吏若干

海軍

0716

其下ニアリテ諸務ニ従事ス

住民

現今居留セル日本人ニ總テ四十二名アリテ八戸  
ヲ構フ醫師一名、師範教師一名、豆腐店  
屋一軒、旅舎兼飲食店ニ軒御用商人等  
ヲ合シ商人ニ皆軍ニ身備隊ヲ目的トスル  
モノナリ

韓人ニ重ニ農ヲ正業トシ其他ニ石油烟草  
燐寸草ノ商業ヲ營ム者少許アリ  
昔時ヨリ江陵城内ノ人民ハ郡守ニ賄賂シテ  
旅人其他ノ國ノ者ヲ脅迫シ詐偽ニ類スル

0717

物資供給

不正ノ所業ヲナシ財ヲ掠ソ以テ生活セ者多数ナ  
リシ由テ現時ニ於テモ未カニ其性質ヲ失ゾガ  
概シテ他府ノ者ニ比シ其性質獨悪ニシテ御シ  
難ク日本兵士ニ彼等韓人ノ最モ恐ルベキモノナリト  
ナシアルニモ拘ラズ屢々江陵人民ニ之ニ反抗シ或  
時ニ我ガ兵士ニ多数打ケ城ヲ未リシヤリト云  
フ

水江陵ノ外城ヲ流ル河ノ河水ヲ以テ飲用  
雜用ノ所用ニ供ス甚カ清潔ナリ  
毎月二七ノ日(旧曆)城内ニ市ヲ設ケラル

近郊ヨリ各商人集リ来リ携スル處ノ物品  
 ヲ買賣又ニ交換ス于明太奥石油燐寸  
 酒 鶏 卵 野菜 織物 雜貨 等 其重  
 十ニナリ江廣ノ産物 柿ヲオトス  
 此市以外ノ日ニ俄カニ糧食等ヲ調達セト欲  
 スル到底不可能ナリ若シ已ク得ホレハ郡守  
 ニ余ジ近郊ヨリ徵発セシノハル可ラス此ト虽モ  
 尚兩三日ヲ要ス  
 陸軍兵備隊ヲ徵發標準價格左ノ如シ  
 牛 一頭 十円ヨリ三十円  
 鶏 一羽 五銭

0719



江陵一帶守備ノ現況

圖ニ示スガ如シ  
 駐屯地ヲ互ニ三名ヅノ連絡  
 兵ヲ巡回セシム

江陵ノ市ヲ終リ次、日ニ連谷ニテ市ヲ開ク

鶏印一佃  
 大根五奉

五厘  
 郵錢



暴徒ノ首魁ニ得タル事項

暴徒ノ首魁

ハ各所ニアリテ各已カ根拠ト

ニ附近ヲ異ナラスヲ常トス韓兵ノ解雇セラレタル者ニ

ニ名ヲ脱脱ト頼シ他ニ皆村民ヲ煽動シテ帷

百姓一揆ニ類スルガ如キ徒黨ヲ成立シ名ヲ義兵

ニ借リテ其実ニ強盗ニ類スル所業ヲ行ヒ良民

ヲ苦しム多クハ山奥ノ山寨ニ立籠リ糧食等ノ

欠乏スルニ至リ密偵ヲ放テテ守備ノ嚴シキハ

見定メ多クハ夜間富村ヲ襲撃シ目的ヲ達ス

ハ直ニ退却ヲナス 江陵附近ノ首魁ヲ

関肯鎬ト稱シ元韓国陸軍歩兵正校

(辨務督長) ミテ江陵ノ出身ナリ或ハ殺戮セラレタリ  
 トノ風評アレハ眞偽詳カラズ能ク巧ミ兵ヲ用ヒ  
 出沒自在ミテ被害サカラス、三涉附近ノ首魁  
 成益松ト稱ス三涉ノ生ミテ臂力強  
 ク世人目シテ怪物ト云フ徒然ヲ募リ附近ヲ暴  
 ラシ暴虎目盛ナリ屢々討伐スレモ出沒自在  
 ミテ容易ニ誅ニ服セズ或ハ殺セリト傳フレハ  
 亦眞偽計リ難シ義兵ヲ募ル教文ヲ得シ  
 ハ後尾ノ掲ゲ) 彼等ノ村落ニ束縛スヤ常ニ  
 間道ヨリ密カニ来ル村長ニ金銭糧食ヲ  
 徴發シ差シ肯ガハ忽チ火ヲ放テテ家ヲ焼ク

村民急リ馳セテ我軍備隊ニ告ゲ共ニ討伐隊  
ノ出奔トナル

討伐隊——ハハ隊長ニ下士卒二十名以下リ率ニ  
サレノ敵ノ五百乃至一千ニ當ラレノ以テ能ク功ヲ奏  
スト云フ討伐隊出奔セバ附近村民ニ敵ノ内應  
者アリテ各山頂ニ展望哨ノ如キモノヲ設ケ直ニ  
之レヲ首魁ニ報ズ首魁ニ直ニ退却捷路ヲ  
經テ山麓ニ帰ル故ニ討伐隊ニ豫メ之ト令スル  
道跡ノ探擇ニ意ヲ用ヒカレハ空ニク敵ニ遭遇セ  
ザルニ應ニアリト云フ又近所ニ暴徒ノ眼ヲ避クニ  
ノ韓人ノ着スル白衣ヲ着ケ討伐ニ向フコト云フ

0723

夕ト一暴徒ノ一隊ニ遭遇スルモ務メテ彼等ニ逃走  
 シ敢テ抵抗スルノ意ナク山岳等ニ追及サレテ據  
 ナキ時ハ始メテ反抗シ来ルモノナリ  
 暴徒ノ武器——ハ七八十挺ノ小銃アルモ他ハ皆  
 勝手ノ獲物ヲ携ヘ小銃ト區別彈藥ヲ備ヘシ  
 容易ニ発射セバ着弾距離モ漸ク四五百米突  
 ニ及ハカント云フ計伐隊ハ巧ニ地物ヲ利用シ常  
 ニ此等ノ暴徒ヲ征シ捕獲西等モ少ナカラズ  
 最近ノ暴徒蜂起——昨年十月暴徒汪  
 文津ニ素戔シ陸軍部用船扇海丸ニ乗乗シテ  
 陸軍歩兵一十隊揚陸シ約一千名ノ暴徒ヲ撃

退セシ由

甲一軍四月廿日

江陵ノ奥跡溪ト称スル

地ニ於テ約五百ノ暴徒、層戦シ賊魁以下五十七人  
ヲ死傷セシ、小銃十七挺、軍刀一挺、彈藥二百五十  
挺ヲ捕獲セリト云フ

甲一軍四月廿日

江陵ヨリ五里北ノ長川

ト称スル地ニ暴徒未幾シ、翌日午後二時半報ヲ  
得テ、女尉一名、下士十九名ヲ率ヒ計内ニ向

セリト詳報係ノ至リシ時ニ未着ナリシ

村民後難ヲ恐ル

被警セシ村落ニ至リ暴

徒ノ逃走セシ方向ヲ問フモノ一人ト多能ク答フモノナシ

之ヲ差シテ口外ニ計伐隊帰リテ後必ズ其者ヲ殺シ  
レ其寔親族モ及ブト云フ差シ又韓人ノ家屋ニ宿  
營セヨカ必ズ其家ニ暴徒ノ多ク燒棄セリト云  
フ

韓人ニ内應者アリ——テ計伐中或ハ村落  
ニ宿營シテ主人等ノ好意ヲシテ、飲食物ヲ勸ムル  
ヲリ斯ノ如キ時ハ頗ル注意ヲ要スルニキミテ、食物中  
ニ毒藥ヲ混ジ、身作麻痺スルヲ見計ヒ、塵  
辛粉ヲ眼中ニ投ジ以テ殺傷シ、携帶スル武  
器ヲ奪ヒシト企ツルヲアリト云フ

成益銘ノ祭ニシテ敬文字

剛東倡義大得益氣泣血馳檄于一國

念君子嗚呼惟我東方檀君化千年有知箕聖設  
八條遺教恭惟我

太祖棄極于中華倂擬五百年之宗社

列聖繼承顛三千里之海山禮樂彬々風俗熙熙文

何時運之中不慮彼異類之內侵改正朔革官

名忍不今日之城棄禮儀喪衣禮無復志

時之文物憶年乙未八月之喪億萬年載天之健言

乙巳十月之喪幾面世極地之憤靡心而刻骨刺

髮而斃頂億兆生民沫血而切齒百神感憤

0727

四忠聯殉嗚呼國猶謂有人乎漢賈生痛  
 笑梁倒豨之歎鄒孟江遺言有教以復於  
 身此之戒惟我全國 愈君子真匪徒臣莫  
 匪民誰無忠憤肝膽受之父母足敢致傷斃  
 膚彼捐膚亂賊嗚呼飛鳥惟同夫我志士  
 仁人一其義如何異是以古有燕轍之死仁存  
 馬島之殉然則四表鞶括八城奮激况六月  
 太麥千古未中伏惟愚侮六以氣異異之心  
 茲茲倡義之首事會同人而錄名處聽踐  
 士之盟興師旆而數勇須赴湯火之戰非敢  
 小子稱亂南不臣已而用兵衛子房之報韓切



五世之離 由於之存楚後七日之笑先先生之而  
言左招人之處而存楚重耳周大尉之一節皆  
左祖於軍中安屬存社之此之氣非厚左祀  
伐晉見直走而入魏何必坐據國東共當名  
對一國戮力合謀與後王室伏惟 念君子  
義之師在事必竟成萬力義指牙通八肩

丁未十一月日

國策信義 大將成益 敬

通

了

0729

回覽後軍務局

御參考

驅逐隊解隊の臨訓示

今期訓練中諸官終始一貫銳意熱心作業從事比較的

短時日(期)に豫定作業を終了し得しは諸官並に乘員同精勵

能く諸般ノ任務ヲ盡シタルニ基クモノニシテ本職ノ満足スル所深ク

一同ノ辛勞ヲ多クス

今茲艦隊付屬ヲ解カシ各其本籍鎮守府復歸ス至當ノ既往

三月ノ經過下其結果ヲ追想シ聊カ左ニ訓示ス所アラントス



法系ノ操縦法

大



軍務局

今期中四月下旬に於て驅逐艦長並乗組士官中八九名を交送し

タルに柏ラス一艇ノ成績概シテ佳良ニシテ持基隊運動聯隊連

動ニ於テ其進歩ノ著シキヲ見ル然レドモ軍艦ノ操縦法並ニ各艇

教練ニ至テハ尚ホ大ニ精勵注意ヲ要スルモノアリ一層奮勵ヲ望ム

魚雷發射

教本部



0730

1-21

一魚雷發射ノ成績ハ墮開夜間トモ概テ良好ニシテ不命中ノ眞少  
 ナカリト深ク満足スル所ナリト雖モ二個ノ水雷ヲ失蹤セシメタルハ遺  
 憶ナリ又襲撃運動モニ教練發射成績表等ニ就テ見ルニ發射位  
 置ノ撰定發射管旋角方位盤使用法等々常ニ十偏一律ニシテ  
 突礮戰況變化ニ應スル所置ノ練習ニ缺ク所アルヲ見ル諸官今由  
 尚ホ一層機變ニ應スル所置ニ就キ改良アラントヲ望ム  
 二魚雷ノ故障沈没ノ魚雷其ノモノ構造上ノ缺點物質ノ不良等ニ  
 起ル所ノモノアリテ取扱者ノ不注意不熟練ノミ歸ス可ラサル所ノア  
 ルヲ知ル然レハ深ク失蹤ノ失或ハ不命中跡ヲ調査スル時發射前位  
 於テ取扱者ノ責ニ歸ス可キモノ亦少ナシトモス候令々分解手入ノ際  
 コリニダール内ニ多量ノ石油ヲ殘置キ爲メコリニダールノ破壊ヲ招  
 キシガ如キ又發射位魚雷進行跡ヲ監視ヲ怠リ其ノ踪跡ヲ失シタ始  
 キ是レナリ諸官ハ魚形水雷ニ就キ多大ノ注意ヲ拂ヘルヲ知ルト雖モ

猶如斯事アリ魚雷各部、調整其取扱法等關し高層、訓練ヲ努メ注意ノ益々密ナランコトヲ望ム

艦砲射撃

一、教練射撃ノ成果、就テ見ルニ其ノ良否、射撃指揮ノ良否ニ關スル所最モ多シ、仮令ハ距離苗頭、修正適切ナラスレテ極端ニ頻繁ニ修正ヲ令スルガ如キ又甚ニキニ至リテハ苗頭、左右ヲ反對ニ令セシガ如キレリ砲火ノ指揮ニ關シテハ攻究練磨ノ餘地甚ク大ナルヲ認ム

二、射撃中艦ノ操縦ニ關シテモ遺憾ノ点甚カラス、仮令ハ航路浮標ニ餘リ重キヲ置キ射撃中頻繁ニ轉舵ニ為シ射手ノ照準ニ困難ヲ感セシメタル如キ是レナリ

三、日常施行スル所ノ内外砲射撃ニ於テ射手ノ訓練同時ニ將校射撃指揮ニ關スル訓練ヲモ併セ行ヒ射撃指揮ノ呼吸ヲ會得セムル如キ方法ヲ講シ置クハ最モ有利ノ事ナリトス

四、内外砲射擊施行ノ場所ニ關シテハ、入隊以來絶ハス注意ヲ其ノ  
危険ヲ豫防スル事ニ就テハ、常事者戒飾セシメ、屢々ナリシ係ラス  
尚ホ危険ト認ル場合甚ナレトモ、射擊術ノ奨励益々盛ナル  
今日危険ヲ考慮セサル者アルガ如キハ、其ノ責真ニ容易ナラス候  
ク、後來ノ注意ヲ望ム

信 辨 術

一、信辨術ニ關シテハ、入隊當時ニ比スルニ其ノ進歩ノ甚ダ著シキヲ見  
ル然レモ、斯術タルヤ、常ニ訓練ヲ怠ラサルニ非サハ、忽チ退歩スルモ  
ノタルヲ思ヒ、日常ノ日課週課ニ之ガ練習時ヲ規定シ置キ、益々發  
達進歩ヲ期セラシメ、フシ望ム

二、驅逐艦水雷艇、其ノ碇泊位置密接セシメ、為メ信辨術ノ練習ニ不便ヲ  
感スルノ大ニ可シ然レモ、日常音聲ニ依テ事ヲ辨シ得場合ニ在  
テモ、必ス信辨ニ依ラサル可ラサル如ク、適當ナル幾多ノ方法ヲ案出シ

置キ之ルカ実施ヲ勵行スルモ或ハ信號機ノ退歩ヲ防止スルヲ得ハ  
諸官ノ攻究ヲ望ム

三、無線電信機ノ進歩ノ蹟アリト雖モ尚ホ攻究ノ餘地アリ時機  
ヲ得ル毎ニ努メテ之ルカ攻究ニ従事セシムヲ望ム

### 艦内諸具ノ整備

一、火薬或ハ氣液油等ノ如キモノハ格納位置ニ關シテハ慎重ニ考慮シ  
各艦區區ニ渉ラサル如ク定メ乘員ヲシテ普ク其所在ヲ知ラシメ  
置クヲ要ス

二、唯ニ火工品ノミナラス艦内諸具ノ格納位置ヲ一定シ乘員ヲシテ周  
知セシメ置クハ艦内作業ノ敏捷ヲ計ルニ最モ必要ナル要件ナ  
リトス

三、手働船輪及其ノ附屬具ノ使用法ニ就キ注意ヲ缺キタルモノアリ艦内ノ  
諸署員ハ總テ其ノ用途ヲ了知セシメ其ノ利用法ヲ豫メ攻究ニ事

ニ望ミテ不覺ニキコトヲ要ス

四、碇泊燈位置就テハ海上衝突豫防法ニ違反セシ嫌アリシ爲メ其  
ノ位置ノ変更ヲ命セシガ然テ外部ニ顯ハルモノニ在テハ一層ノ注意  
ヲ望ム

### 日課週課

一、教育訓練關ニテハ緩急ヲ慮リ教練順序ヲ定メ豫定表ニ  
依リ循環能ク一方ニ偏セズ熟達ヲ計ルヲ要ス別科ノ如キモ亦然リ  
而シテ軍歌、体操、擲擧等体育ニ益スルモノハ週課表ニ定メ置  
キ居住ノ不便ナル小艦ニ在テ乘員ノ健康ニ深ク注意ヲ拂フ可キハ  
駆逐艦長タルモノ最モ勉ク可キ所ナリ

### 軍紀風紀

一、軍紀風紀ニ關シテハ尚ホ大ニ注意ヲ要スルモノアリ艦内和氣暖カニ  
家ノ如クナラサル可ラサルハ元ヨリ論ナレト雖モ能ク公私ノ別ヲ明

ニ職責ニ從ヒ各其ノ分ヲ守ラシメサル可ラス時、准士官、下士  
及卒間ノ關係ニ就キ如何ニキ、風評スルヲ聞ク、一ノ際ノ考慮  
ヲ要スヘキモノナリト認ム

### 汽罐ノ取扱

船ノ速カト使用罐トニ其ノ間ノ適應スル個數アリテ罐ノ保存及石  
炭ノ經濟ニ多大ノ關係ヲ有スルモノナルハ明ナル事實ニシテ或速カ  
ニ對シ適應スルモノヨリモ常ニ少キ罐數ヲ使用セシカ其ノ害ノ生ラ所  
多大ナルハ既ニ充分知ラセラル所ナルヘシト雖モ其ノ一二ヲ舉グニ  
一、高度ノ燃燒度ヲ要スルヲ以テ罐ニ無用ノ緊張ヲ與ヘ罐ノ命  
數ヲ短縮シ或ハ不測ノ危害ヲ生スルコトアリ  
二、煙突、焚口、戸及圍板等ヲ燒損スルノ程度大ナリ  
三、石炭ノ不經濟ヲ生ス  
四、汽罐室送風機械ニ故障及損害ヲ生セシムルコト多シ



又々多キニ過リル時ハ

石炭ノ不經濟ヲ来スコト大ナリ

故ニ適應スル罐數ヲ定ムルニハ實驗成績依ラサレ可カラスト雖モ比較  
的少キ罐數ヲ使用スルヨリハ多キヲ以テ罐ノ保存及保安上適當ナル  
取扱法ナリトス候令ハ吾レハ曾テ一罐ヲ使用シ最大速力十五哩ノ真  
タリトアリトナレ常ニ此ノ速力ヲ顯出シ得ルヲ信スルモアリ然レ此罐蓋  
汽釜主力ハ内部ノ潔不潔給水ノ温度及焚火ノ技術等ニ依リテ  
左右セラルコト多ク常ニ十五哩ノ速力ヲ顯生シ得ルモノト輕信スルガ  
如キハ誤解ノ入ルモノニテ罐ニ危害ヲ生セシムル基トナ可シ  
今聯隊或ハ基隊運動ヲナシ原速十哩全速十五哩トモ全速力ヲ  
使用スルノ時機稀ナリトスルモ決シテ一罐ノ最大速力十五哩ニ倚信シ  
テ一罐ノミヲ使用スルカ如キハ適當ナル罐ノ取扱法ニテ如何トナ  
ルコト速力急ニ十五哩ノ速力ニ變スルニ當リテ送風機械面轉數ヲ

増し多量ノ石炭ヲ一時投入シ火層ヲ厚クシル所ノ所置ヲ採ラザル可  
カラズ此レ前述ノ如ク罐ニ急激ナル緊張ヲ興フルニナラス此際急  
主機械ノ回轉數ヲ減セサル可カラサル場合等ニ至ラハ安全弁ハ正確動  
作スルニモセヨ水管ノ破裂ヲ起ス等ノ危険ハ間々生ル所ニテ其ノ实例  
ハ從來乏シカラス水雷発射艦砲射撃等ノ如ク短時間高速力ヲ要  
スル場合モ亦然リトス斯ノ如ク主機械ノ回轉數ヲ変スル多キ場合ニ於テハ  
石炭ノ經濟ニミシテ顧慮スルコトナク餘裕アル罐數ヲ準備スルヲ可トス  
然リト雖モ高度ノ燃焼度ヲ用ヒルモ焚火練習上必要トスル所ナラ  
時ニ之ヲ用ヒテ回轉數ノ変化ニ應スルノ焚火法ヲ練習セシ奇老ノ  
十ハ故當高者ハ彼此ノ關係ニ顧ミテ速カト使用罐數ト關係ニ  
注意シ罐取扱上ノ保身ヲ計ル共ニ有利ナル定律焚火法ヲ勵行セ  
ンコトヲ要ス

之ヲ要スルニ驅逐隊カ去ル二月十日當隊ニ入隊條既述スル  
口遣訓示要領今尚未諭ル所ナレ諸官缺ク之ヲ服膺スル  
ヲ見テ雖モ猶茲ニ一言注意ヲ喚起ス希ク益々奮勵驅逐隊  
全勢力ヲ發揮スルニ努メラシムヲ望ム

明治四十一年五月十五日

第一艦隊司令官 藤井 較一

0739

報告

六月廿三日



艦政本部

軍務局

教育本部

軍令部

第四部長  
第二部長

部員兼部

局員



外波

別冊添

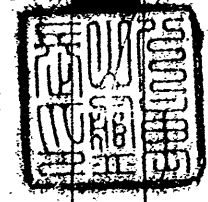
進奉

利登

報告書進奉之件

一軍艦(唐山)重油見學子實施報告 臺部

海軍大臣男爵齋藤 實 敬



八重山第七六號

參謀長

副官

參謀

官



6-24 9

昭和十六年六月十六日

7-17-8 0740

515

七五

軍艦八重山重油見學實地報告

0741



軍艦八重山重油見學實施報告

明治四十一年六月十一日

於横須賀

富田八重山機團長



明治四十一年四月十日横須賀第一五號ノニ以テ本艦ヲ各軍港  
及ビ艦隊所在地ニ回航シ重油燃燒實際地ヲ機關部海士官以上ニ  
見學セシムベキノ命ニ據リ四月廿日横須賀投錨回航ノ途ニ上  
再末日ヲ重タル四十有八日今ヤ無事任ヲ遂ゲテ茲ニ復命スヨリ得  
ルニ至心モノ思フニ之レニ巡航中各鎮守府及ビ各艦隊機團長ノ  
熱心ナル援助ニ由ルモノニテ茲ニ其ノ謝意ヲ表スルト夫レ各港務  
部下物品庫ノ載炭並ニ補給水搭載等ニ對シテ特別ナル取扱ヲ  
受ケタルトハ等シク感謝ニ堪ハル処ナリ夫レ現下重油ノ事々々各艦

研究ヲ了シ傳テト云フニマス、實ニ前年ハ尚ホ遠達ナリ、業々ハ更ニ  
研鑽以テ他日ノ大成ヲ期セシ茲ニ各地ニ於テ見學教授ニ因スル事  
項並ニ此、航海ヲ利用シ實際ニ得ル諸成績ヲ報告ス

洋  
全

0744



目錄

一 巡航日誌 附 航路圖

二 各軍港并艦隊於此見及者并各見及者之要點  
質問概要

三 重油關之一般思想、詳細概要并見及者理解程度

四 巡航中實驗セル各種成績并 四線圖

一、八、十、十二、十四、理、對セル和炭專燒ト重油混燒ノ場

合セル比較成績

二 今右曲線圖

三 煉炭專燒ト重油混燒ノ成績

四 特種煉炭實驗成績

五、八、十、十二、十四、理、對セル内外部油消費量及各種

標名圖并對セル外部油消費量

六、今右曲線圖

七、貨艙之得免三三三事項

五、巡航中消耗之需品及全價概概算

六、焚火、場合、石炭專焼、汁、混焼、汁、相違ノ矣

七、重頭使用、体、揮瀉、及、影、響

八、後、東、改、造、之、意、見

九、本、航、海、中、於、ケル、揮、瀉、却、一、般

11

11

0746

日誌 附航路圖

四月十四日 横須賀鎮守府長官ヨリ次ノ命令アリ

一、其、艦ハ準備整ヒ次第出港シ横須賀出立ヨリ

帰着マテ五十日以内ノ日数ヲ以テ吳、佐世保舞鶴、

各軍港迄第一、第二艦隊所在地・便宜通航シ重

油燃燒実地ヲ機關部准士官以上ニ見學セシムベシ

但シ見學ニ關シテハ別紙重油燃燒見學実施方

案ニ依リ尚ホ其ノ細目ヲ定メ之ニ關係各司令長

官ニ通知スベシ

重油燃燒見學于実地方案

一、重油燃燒ノ実施ヲ機關部准士官以上ニ見學セ

シメシ為メ軍艦八重ヲ吳、佐世保、舞鶴各鎮守

府長艦隊所在地ノ順次回航セシメ必要ナル教示及

0747

〇 實地見學ヲ為サシムル

但し艦隊ハ八重山回航當時鎮海灣着し、八重

山航路近キ日本沿岸所在ハ付テ限ル

ニ各地ニ於ケル軍油燃焼實施回教ハ四回内外トシ

一回時間、約四時間トス

手見見學ノ人員ハ一回約三十人トス

四八重山艦長ハ巡教發着後、各地ニ於テ見學子實施

等ノ目取ヲ予定シ予ノ海軍大臣并、関係各司

長官ニ通知シ置キ變更ノトキハ其都度電報スベシ

并各司令長官ハ麾下機關部准士官以上并、工廠造

機部員等、見學日割及敷教、便宜定メ置ク

六八重山艦長ハ巡教終了ト共、見學子實施報告ヲ所轄

鎮守府司令長官ヲ經テ海軍大臣ニ提出スベキ

(終)

越ハテ十八日 実施方案細目ヲ定メ巡軌々路予定ト共ニ海軍大臣

長ニ關係各司令長官ニ提出セリ

軍艦八重山重油積燃見學ヲ實施

方案細目

一 本艦ハ横須賀鎮守府ヨリ指定ノ重油焚燃見學ヲ實施方

案ニ基キ吳ノ佐世保、舞鶴ノ各鎮守府長、第一第二艦隊、

准士官以上ノ重油焚燃ノ實況ヲ見學セシムルヲ主眼トス

二 重油焚燃實況見學ニ先カク機會ヲ得ハ本艦到着ノ翌日

適宜ノ場所ニ於テ本艦裝備ノ重油焚燃裝置及ヒヨウノ實

験ニ供シタル各種ノ焚燃器具ヲ焚燃ノ用ニ至適其他重油

ノ性質及ヒ是ノ關係スル事項ノ概況ニキ講義ヲス

三 重油焚燃ノ際ニ石炭ト重油ノ混燒法ノミヲ行フ使用スベキ

六  
一五

炭種ハ汽走中煙突ヨリ上昇スル發煙ノ状況ヲ研究スルニ便  
ナラシムル為メ第二種煉炭ヲ用ウ

四各地ニ於テハ實施回数ヲ大凡四回ト是ノ四日間ニ於テ之ヲ行ヒ  
内二回ヲ專ラ士官ノ見學ヲ攻究シ他ノ二回ヲ機關長官長官  
上等機關長官ノ見學ニ當テ見學者ヲシテ實地ニ焚煙機取  
扱ノ一般ヲ攻究修得セシム

五各地ニ於ケル當日ノ運力及出入港時間 (別表ヲ見ス)

六見學ノ當日ノ主要研究項目 (項目ヲ見ス)

拾九日會々依リ水雷學校卒業式ニ禮砲發射ヲ為シ長濱  
ニ回航ス

貳拾日午伍貳時拾五分以テ回航ノ途ニ着テ雨來リ行動ハ

別表ニ示ス如シ

日次	月日	発	着	運数	速力	使南島敷試驗前記事
----	----	---	---	----	----	-----------

0750

13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
二	平 一	五 〇	二 九	二 八	二 七	二 六	二 五	二 四	二 三	二 二	二 一	甲 二 〇
	京都	吳							茶 山			長 浦
行 敷		富 島							吳	茶 山		
	二 三 八	一 六							六 九		四 七 五	
七	〇 八	〇	八 八	八 〇	八				二 一		一 〇	
五	三	四	三	三	三	三			五		四	
	吉水 清元	八 八 清元 八 八 清元									八 八 清元 八 八 清元	
三				八 八 清元			八 八 清元		講 義			

0751

26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14
一五	一四	一三	一二	一一	一〇	九	八	七	六	五	四	三
					志南俊	馬山浦			鎮海			竹敷
					佐世保	志南俊			馬山浦			鎮海
					三〇	一二五			七			六三
					一〇	一〇			八	八	八	由二八
					四	三			三	三	三	由三四
												由三
												由三
												由三

0752



39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27

二八 二七 二六 二五 二四 二三 二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六

舞鶴 三保 舞鶴 三保 舞鶴 三保 舞鶴 三保 舞鶴 三保 舞鶴 三保 舞鶴

二六 一六 一三 一三 一三 一三 一三 一三 一三 一三 一三 一三 一三

一四 八 八 八 二 二 二 二 二 二 二 二 二

一五 三 三 三 三 四 四 四 四 四 四 四 四

舞鶴 三保 舞鶴 三保 舞鶴 三保 舞鶴 三保 舞鶴 三保 舞鶴 三保 舞鶴

舞鶴 三保 舞鶴 三保 舞鶴 三保 舞鶴 三保 舞鶴 三保 舞鶴 三保 舞鶴

0753

		48	47	46	45	44	43	42	41	40
							六一			
		大	五	四	三	二		三	三	二
		館		内	鞆	徳		部	濱	尾
		山		海	津	山		崎	田	前
		増	館		内	鞆		徳	部	濱
		須	山		海	津		山	崎	田
		二	三		六	二		四	一	九
		五	六		一	七		三	二	〇
		一	一		一	〇		一	一	〇
		〇	〇		〇	〇		〇	〇	〇
										片
									右	
								全		
							七			
							〇			

0754



備考  
全線ハ往航シ莫線ハ帰路ヲ示ス  
而シテ赤線ヲ以テ示シテ各埠頭  
驗ヲ施行セル所ナリ

0755